

「社会心理学に『集団錯誤』の呪縛から解き放たれる日は来るか」

山口裕幸

九州大学大学院人間環境学研究院

心理学がこころの「科学」を標榜してスタートした以上、F.A. オルポートの「集団錯誤」批判は、至極全うであった。心は個人に宿る（還元される）ものであり、集団や社会に宿っているものを心と呼ぶのはふさわしくないという指摘に、心理学者は反論できない。そして、集団錯誤の指摘は、心理学の方法論を個人対象に限定する強い影響をもたらした。社会心理学は、K. レヴィンのグループ・ダイナミクス研究によるブレークスルーを経てもなお、個人主義的方法論至上主義の集団錯誤の呪縛のもとにある。

その結果、個人が集まり集団を形成し、集団としてまとまって行動する過程で集団に宿る（創発される）雰囲気や規範、チームワークなどに関心を持つこと自体、社会心理学者にとっては、厄介な荷物を背負い込むようなものであった。その厄介な荷物といかに向き合い、折り合いをつけたらよいのか、発表者の愚かな試行錯誤の日々を振り返りつつ、現在取り組んでいる方法論を紹介して、討論を試みる。